

新建築あいち

2024.4月号

新建築愛知支部事務局：株式会社 宮工務店 気付

〒486-0904 春日井市宮町 1-11-25

URL <http://nu-ae.com> ホームページ(2022年4月～)

TEL 0568-34-7775 FAX 0568-34-7797

■『これからの高齢者の住まい 考えてみませんか!』



2024年3月9日(土)の午後、愛知県消費者大会実行委員会主催で、新建築愛知支部代表幹事の福田啓次さんにより、『これからの高齢者の住まい 考えてみませんか!』という題目で講座を開催しました。

参加者は、女性12名、男性4名。年齢は70代中盤～80代のようにお見受けしました。会場は、名古屋市北区にある愛知県住宅供給公社の大曽根住宅の1階にある交流拠点「ソーネおおぞね」のソーネホールを利用しました。

福田さんは、高齢者になるほど自分を大切に、居場所づくり、地域とのつながりづくり、支え合うネットワークづくりをしていくことが大切とお話されました。

孤独にならない、孤立させない環境づくりが大事ということからも、今回説明をお聞きして、建物内に朝8時から夜21時まで食事を提供する「カフェ・レストラン」や有機野菜などを販売する店舗、資源買取センター、自由に利用できるイベントスペース「ソーネホール」、相談センターなどが備わっている分散型サービス付き高齢者住宅(サ高住)は、戸建てと同様な隣近所との付き合いが求められるので、そのニーズに合っていると思いました。

大曽根住宅「ソーネおおぞね」や分散型サ高住については、新建築の『建築とまちづくり』誌 No.526/2023年1月号、No.538/2024年2月号をご参照ください。



大曽根住宅は、ワンフロア12室、11階建ての建物が4棟あり、その中に分散してサ高住の住戸が無作為に配置されています。一住戸49.95㎡。床に杉の無垢材を使用しているそうです。実際の住戸は見学できませんでしたが、新たに工事中の住戸が、4月上旬に内覧会があるとお聞きしたら、矢継ぎ早に質問が飛び、まるで入居説明会の様相になり、予定の時間を大幅にオーバーして終了しました。(報告/奥野 明美)

《新建築愛知支部から参加書の感想》

福田さんが講師を務められた講座に参加しました。勿論、今年還暦を迎える自分の今後の事を考えてです。年を重ねると、身体機能・認知機能の低下や様々な疾患が見受けられ、思い描く生活を送ることが難しくなるかもしれません。

社交性・社会との繋がりがとても重要なのは、色々なご高齢の方を見ていて実感していますが、性格もあるのでどうしたものかと。それに何といても必要な物の一つは、『お金』ですね。

国民年金生活者となる私、年金だけでどんな生活が送れるのか?というところに落ち着きます。

まあ、不安なことばかり考えてもいられません。

(自由空間/堀尾 千絵)

■ 「地震後の避難過程と居住福祉」

～居住福祉と生活資本の構築(162)

岡本 祥浩

能登半島地震の発生から二月半以上が経過したが、この間の避難過程を通して被災者の生活資本の維持の困難さが明らかになってきたように思う。その困難とは、被災者の避難過程での転居による一人ひとりの生活資本の維持困難である。本稿では、生活資本維持の観点から避難過程における転居の多さとその影響を考えたい。

多くの識者が地域の災害復興にコミュニティの果たす役割の重要性を指摘している。しかしながら、能登半島地震では避難所の居住環境を適切に保てず、被災者は1.5次や2次避難を余儀なくされている。被災者の避難所を転々とする避難は、転居のたびに人と人とのつながりを弱め、コミュニティの醸成を困難にする。避難所の頻繁な転居は、道路・電気・水道・港湾などのインフラ崩壊とともに住宅被害の甚大さをも物語っている。読売新聞(2024年3月1日)の報道では、石川県の応急仮設住宅建設目標の4,600戸に対して、それへの申し込みが7,971戸であったという。需要に対して供給が足りず、民間賃貸住宅を活用したみなし仮設(2年以内)を県内に4,500戸、県外に3,700戸、公営住宅(1年以内)を県内に900戸、県外に8,700戸供給する予定を立てている。被災地に比較的近い石川県内への居所の提供が需要に追いつかないので相当数の被災者が県外避難を余儀なくされる。このように被災後の避難の場を確保するだけでも幾度かの転居が必要になる状況であり、被災者が関わるコミュニティ醸成の困難が懸念される。

読売新聞(2024年3月1日)に被災者の被災後の転居状況として4事例が紹介されているので、それを確認してみよう。一番目の事例は、小学生までの子ども三人を抱える五人家族。輪島市内の自宅が一部破損し、自主避難所に避難する。金沢市内の1.5次避難所に移動したが、子どもがノロウイルスに感染したために、再び加賀市内のホテルに避難する。しかし北陸新幹線延伸後には観光業の振興を考えて転居を考えているという。二番目の事例は、長男と暮らしていた76歳の母親。輪島市内の自宅が一部破損、公民館に避難したが加賀市内のホテルに避難。長男が社宅に転居したため、金沢市内の長女宅に転居。三番目の事例は、60歳の夫婦。輪島市内の自宅が一部破損し、その近くに車を止めて車中で過ごした。その後、野々市内の長女宅、輪島市内の兄宅と転居を繰り返す。現在は輪島市内の木造築40年の作業場で過ごしている。四番目の事例は、珠洲市内の自宅が一部破損した60歳の男性とその両親。近くの集会所に避難したが、両親が怪我や体調不良で金沢市内の病院に入院。母は2月に死亡し、本人は富山市内の2次避難所で一人暮らし。

このように被災者に頻繁な転居が起こるのは、避難所の利用期限などの制限があることと不適切な避難所の環境に原因がある。例えば避難所の利用制限として、輪島市では「復興に向かう取り組みを強化していく段階に来ている」として、自主避難所への物資配送を終了する(2月24日「中日新聞」)。宿泊施設の避難者受け入れについて国から支給される受け入れ費用では経営が困難で、長期間続けることが困難である(2月27日「日本経済新聞」)という事情もある。

環境の整わない避難所での避難生活は、高齢者の身体機能や筋力低下を招く。筋力が低下して立ち上がれなくなったり、畑仕事などの生きがいや知り合いと切り離されて伏せがちになったり、急激に体が弱ってしまった例がある(1月30日「朝日新聞」)と言う。避難所の使命を全うするために「助かった命を支え、地域や社会の中で生活していくための支援が求められている」(栗原正紀日本災害リハビリテーション支援協会代表理事)(同上)という。

被災から避難、仮設住宅までの避難過程で繰り返される転居は、被災者の生活資本維持の重要性と困難性を示す事実だと言えよう。

(中京大学教授、日本居住福祉学会会長、新建会員)

歴史探訪シリーズ 35 緑区

酒蔵の並ぶ町・大高町

知多半島とその周辺は、古くから醸造業の盛んな地域ですが、緑区大高町の大高城址の北、大高川左岸の地域には、現在でも酒造業を営む商家が存在しています。大高町の酒造の起源については明らかではありませんが、元禄10年(1697)には酒株の制度があつたと云われていますから、江戸時代初期から酒造がおこなわれていたものと思われま

す。明治の初めには、9軒の酒造業者があり、製品は東海道線が全通する明治22年(1889)までは、大高川から樽船に乗せて、扇川へ出て、海上路で江戸、紀州まで運んでいました。現在では、神の井酒造、萬乗醸造、山盛酒造の3軒のみとなっていますが、そのうち、西門田にある萬乗醸造は、寛政6年(1794)創業と云わ

れ、江戸時代末期には工場を拡張するなどして、酒造量を大きく増加させました。

この工場の出入口左手には、今は使われていない赤レンガで造られた大きな煙突があり、萬乗醸造のシンボルとなっています。この辺り一帯は酒造業を営む商家の主屋、酒蔵、土蔵が連続して並ぶ独特の街並みの景観が見られる所となっています。

なお、室町時代末期の大高城は今川義元の勢力下にあり、近くの丸根砦、鷲津砦は織田信長の手にあつて、両軍は桶狭間の戦いを前にして、激しくにらみあつていました。

永禄3年(1560)桶狭間の戦いが終わつて大高城は廃城となり、現在は、丸根砦、鷲津砦と共に、国の史跡に指定されています。



萬乗醸造 出入口と煙突

■ 新建愛知支部 2024年2月 支部幹事会だより

2月21日（水）19:00～21:00（オンライン）

リモート参加者／奥野、黒野、福田、甫立

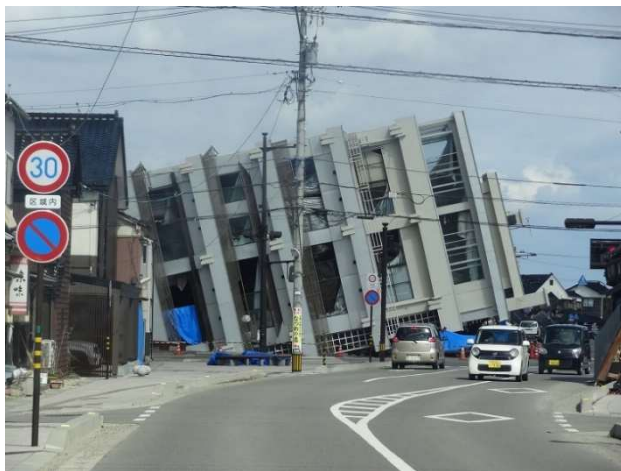
- (1) 2/19に北陸地震後の緊急復興支援会議が開催されました。今後も定期的で開催されます。
 - (2) 2/3に地方自治研究所全国集会 in 愛知の会議がありました。5/19、10/5・6日に開催予定です。
 - (3) 今年は、集まれる企画をみんなで考え、顔を見て交流のできる支部にしようと話しました。
 - (4) 支部の皆さまから、企画を募集しまして、楽しめる学べる企画や見学会の開催や提案します。
 - (5) 職人不足で困らない為に、共同事業化の組織化検討を進める事を決めて、源樹会と連携をします。
 - (6) 新建に協力してくれる施工者、職人、各種の営業さん等に声を掛けて、リスト化しています。
 - (7) 「防災マニュアル」連絡網を利用して、支部企画、拡大と更に積極的に声掛けをしています。
- 今後の幹事会は、3月18日（月）、4月17日（水）、5月15日（水）、午後7時からと決めました。

■ 能登半島地震復興支援本部の報告がありました

能登半島地震復興支援本部の先発隊として、3月6日から7日に石川支部の杉山真さん、本部長の丸谷博男さん（東京）、事務局長の新井隆夫さん（群馬）、全国災対連世話人の千代崎一夫さん（東京）、事務局次長の山下千佳（東京）で視察と全国災対連の加盟団体の農民連が開催している「炊き出し」に顔を出しました。

6日は、主に液状化がひどかった地域の内灘町、津幡町、宝達志水町、羽咋市、七尾市に行きました。

7日は、朝7時に金沢駅近くを出発し輪島へ。穴水市の手前で一車線になるところは、多少渋滞しましたが、穴水を過ぎると車にほとんど出会わないというぐらいでした。8時に羽咋川を越し、9時にはJR「穴水駅」を通過しました。道路は段差や亀裂があり、陥没しているところや崩れているところもありました。50cmほどの段差も多く、各所で復旧工事をしていました。火災があった輪島朝市、建物の倒壊が多かった輪島市内などに行きました。まずは支援本部として一步を踏み出しました。今後の支援や各地域での防災に取り組むにあたり、定期的に復興支援会議や現地視察をおこないます。



■ 愛知支部事務局・財政からのお願い

新建会費『2024年前期分』の請求書を後日、各自にメールでお送りします。

2023年末納の方には、2024年前期分と合わせて請求させていただきます。

※ 振込手数料は、各自でご負担をお願いします。 ご協力を宜しくお願い致します。